

早稲田大学 法学部 古典 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式・記述式併用
試験時間	国語 90 分
出典	『花鏡（かきょう）』世阿弥 能楽論 【Ⅰ】 舞声為根（まひはこゑをねとなすこと）の一部 【Ⅱ】 万能縮一心事（まんのうをいつしんにつなぐこと）の一部
解題	筆者四十過ぎから老後までの約二十年間の著述を集成した能楽論。基礎的演技論・応用的演技論・習道論・理念的な論などが混在するが、総じて演者の心を重視した説が多い。応永三十一（1424）年の成立。長男の観世元雅に相伝した書。

〔大問別講評〕

番号	設問	コメント
一	問一ノ一	〈内容説明〉
	問一ノ二	〈内容説明〉 問一ノ一・二と共に本文中の用語を本文に照らし、その内容を問う設問。知識を問うものではなく、読解力を問う。選択肢の記述も、本文の内容も難解である点が、設問を難しくしている。
	問一ノ三	〈漢文〉 返点を付す設問で、「不能」は常套の句形、その他は複雑な句形を含まないので、基本問題といえよう。なお、漢文の「眼不能見其睫」は『顔子家訓』涉務に見える句。
	問一ノ四	〈内容把握〉 傍線部の「態（わざ）」の本文中での意味をとらえた上で、本文中で用いられた対義の語を探すには、本文の内容の把握が要求される。なお、世阿弥の言う「態」は身体的演技全体を指し、正解の「内心」は、心の内に秘めた心づかい、心底での配慮を意味する。
	問一ノ五	〈語釈〉 古文単語としての「匂ひ」の意味を問うものではなく、本文中における「匂ひ」の内容を問う設問。本文の内容の把握が要求さ

		<p>れている。法学部では、99年度『雲上歌訓』の問一ノ一に類似の設問形式が出題されている。</p>
	問一ノ六	<p>〈内容把握〉</p> <p>「心」の意味を問う問題。本文の深い内容の読解を必要ともしない。傍線部Cの直前の引用句「この糸切れん時は崩れなん」が意味の説明になっているので、傍線部Cのみが「意味」という意味で用いられ、他の傍線部と異なることは明白。</p>
	問一ノ七	<p>〈文法〉</p> <p>「にて」に関する識別の問題。傍線部6の上部の「せぬ」を名詞ないし名詞句として把握できなければ、判断に少し迷うかもしれない。</p>
	問一ノ八	<p>〈文法〉</p> <p>「なむ」に関する文法的説明を求める、頻出する設問。ただし接続する語の活用形が断定できないので、内容を踏まえての識別が必要である。</p>
	問一ノ九	<p>〈内容一致〉</p> <p>それぞれの選択肢が、【Ⅰ】【Ⅱ】のいずれのどの記述に対応するかを判断し、また本文に記述のない選択肢を消去する方法で正確に判断すれば、正解を得られるだろう。ただし、本文自体やや難解で、選択肢も複雑な記述であるので、やや難。</p>

〔総合コメント〕

難易度 標準～やや難

法学部の過去二年に比べると、01年度の『たまきはる』が800字強、02年度の『源氏物語』がおよそ650字であって、本年の『花鏡』は1000字強でいささか長めの文章と言えよう。内容としては、高等学校では触れることの少ない文章で、注が付される語も含むものの、専門用語や難解な語句も含まれ、内容を把握しにくい文章である。